

# 史遊会通信

No.233号  
平成26年  
7月10日

編集  
042-754-9360  
arai-hiroshi@  
jcom.home.ne.jp  
新井宏

六月講演要旨

## 続日本紀・二つの「なぜ？」

平山善之

その一、なぜ書かれなかったか？  
皆麻呂の結末

1

現在の宮城県栗原市城生野の地に伊治城  
(これはりのき)が築かれたのは神護景雲元年  
(七六七)十月であつた。この土地は、多賀、  
桃生の二つの城から更に北進した、奈良朝廷

の最前線であり、聖武天皇に献上された金を  
産出した地である。

時の、称徳天皇は大いに悦び関係者を賞し、  
その翌年、翌々年と相次いで坂東諸国に令し  
て移民を奨励せしめた。さらには、「俘宥百姓  
二千五百餘人置伊治村」とあるから、いかに  
移住政策を推進したかがわかる。しかし、こ  
の政策は、以前から居た住民、即ち蝦夷と呼  
ばれた人たちの反感を買った。宝龜五年、彼  
らの蜂起があり、桃生城が襲われるという事  
態も起きた。これ以降、東北地方は朝廷と蝦  
夷の間に緊張関係が続く。  
朝廷は蝦夷の首長に位や呼称を与え、大領  
(郡長)などに登用し、夷を以って夷を制す

## 十月史遊会の時間変更

大分先のことですが、十月二十二日(水)の例  
会の時間を都合により午後三時から五時に  
変更します。

幹事

例会のお知らせ

◎ 七月例会

日時 平成二十六年七月二十三日(水)

午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 佐藤健一氏

テーマ 『塵劫記』で扱っている数学遊戯

九月号自由執筆 鯨游海、平山善之、

小田紘一郎の諸氏 締切七月末

◎ 九月例会

日時 平成二十六年九月二十四日(水)

午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 瀧澤 中氏

テーマ 未定

十月号自由執筆 三戸岡道夫、隆恵、

中込勝則の諸氏 締切九月末

るといふ策を取っていた。当時伊治郡の大領が外従五位下伊治公皆麻呂であった。ところが、宝龜十一年（七八〇）三月、伊治公皆麻呂は反乱を起こして、按察使陸奥守紀広純を殺し、陸奥国の国府・多賀城を襲つて財を奪い焼き払つた。続日本紀（以下続紀）によれば、牡鹿郡大領道嶋大楯と確執あり、機会をみてこれを殺し、ついで広純を害した、という。伊治から多賀まで押し寄せ財を奪つたということは、単純な個人間の争いではなく、原住民と侵入者との対立と考えるべきであろう。

## 2

朝廷は衝撃を受け、すぐさま兵部卿藤原繼繩（南家）を征東大使、大伴益立、紀古佐美を副使に任じて討伐に当たさせた。繼繩は遥任である。しかし、戦果上がらぬため九月には繼繩を更迭し、藤原小黒麻呂（北家）を持節征東大使として、現地に赴かせた。坂東、北陸諸国に命じて幾度か食料や軍衣を調達している。その後何度か督戦の勅書や、人事の記事はあるが討伐したという報告はない。

翌年天応元年六月、新帝・桓武天皇は「去る五月廿四日の奏状を得て、具に消息を知りぬ。但し、彼の夷俘の性と為ること、蜂のごとくにむらがり、蟻のごとくにあつま

りて首として乱階を為す。攻むれば即ち山藪に奔りしりぞき、放せば即ち城塞を侵し掠む。而して伊佐西古・諸紋・八十嶋・乙代等は賊の中の首にして一以つて千に当る。迹を山野にかくし、機を窺い隙を伺えども、我が軍威を畏れて、未だ敢えて毒をほしいままにせず。今將軍ら、未だ一つの首斬らずして先ず軍を解く。事已に行い訖りて之を如何ともするなし。但先後の奏状を見るに、賊衆四千餘人にしてその首を斬る所僅かに七十餘人、遺る衆なお多し。何ぞ先ず凱旋を献らんとすみやかに京へ向うことを請うべし。たとえ旧例ありとも朕取らず。副使内蔵忌寸全成・多朝臣犬養等の一人、馱に乗りて京に入り、先ず軍の中の委曲を申し、その餘は後の処分を待つべし。」

この勅書を無視するかのようには、二カ月後の天応元年八月、小黒麻呂は都へ凱旋した。続紀には「八月辛亥陸奥按察使正四位下藤原朝臣小黒麻呂、征伐事畢りて入朝す。特に正三位を授ける」とある。続紀の同年六月から八月までの記事を繰り返し見ても、小黒麻呂が兵部卿から民部卿に移つたという他、皆麻呂や朝廷軍の記事は全くない。反乱軍がどうなったかの記述もない。

この二カ月間に何があつたのか。皆麻呂は

どうなったのか？そして小黒麻呂が違勅の罪にも問われず、三階級特進したのはなぜか。

## 3

三階級特進は尋常ではない。都中が熱狂する大勝利を収めて帰つたはずである。二ヶ月前に叱責の勅が出されたのにこの褒賞なのだから、その勝利の記事は、続紀が編纂されるに当つて、消されたのでは？

編纂者は繼繩である。前任の征東大使で小黒麻呂に替えられた。南家と北家で同世代、互いに帝寵を争う仲である。ライバル意識も強かつたであろう。しかも二階級も上であつたのに逆転されて面白からうはずがない。小黒麻呂の手柄など誰が書いてやるものか。

皆麻呂事件の終末が闇に消えている理由を私は最初、繼繩の小黒麻呂に対する嫉妬心であらうと考えた。昨年六月、「史遊会通信」の『伊治公皆麻呂事件』はその趣旨で書いた。

しかし、その後、そう単純ではない、と思うようになった。

対えみし戦争で大会戦が果たして有り得たであろうか。朝廷軍の完全勝利、と言える戦闘があつたであろうか。無かつた、と考える。

五月の奏状で小黒麻呂は「これはゲリラ戦で、泥沼の様な、終りのない戦です。」ということを訴えたことが六月の勅で察せられる。

まさに攻めれば山や藪にかくれ、放っておくと攻めてくる。朝廷軍はいいようにあしらわれる。前年十二月、副將軍百濟王俊哲は賊に囲まれ、辛うじて囲みを破るを得た。

只、これを受け取った朝廷は畿内や西国の戦争経験で判断するから理解が出来なかった。

まして軍を解いたという。そこで、直接聞きたいから、副使をよこせ、と命じたわけである。これを見た小黒麻呂は自分が直接天皇に説かなければなるまいと考えたであろう。自分が説けば解かって貰えるが、他の者では駄目だろうと考えた。桓武天皇とそれだけ昵懇であるという自負もあった。そこで敢えて違勅であろうと、彼は上京を強行した。

即ち、継縄が書かなかったのではなく、書く材料がそもそも無かったのである。それでは何故、三階級も特進させたのであろうか。

私は、天皇は小黒麻呂の説明するところをじっくりと聞き、理解したのだらうと思う。そして、その後の東北経営のあり方について知識を吸収するところ、大なるものがあつたのだと考える。後に坂上田村麻呂を起用して以降大いに北へ伸ばすことができたのも、この報告が役立つた。

しかし、朝廷としては、諸国に命じて兵士や食料、軍衣を動員した以上、大勝利で収束

した、とする必要があつた。ウヤムヤの内に終らせることは、国の体面上出来なかった。

小黒麻呂の三階級特進は「凱旋」を誰にも強く印象付けるための手段であつた。

継縄も翌九月には正三位に昇格している。

その二、なぜ、桓武天皇は自分の治世まで書かせたか

## 1

称徳天皇は道鏡を皇嗣とする希望を阻まれ、皇太子を立てず薨じた。廷臣は割れた。

左大臣藤原永手は白壁王を、右大臣吉備真備は文室浄三（元智努王）を押した。前者は天智天皇、後者は天武天皇の孫である。結局、藤原一族の結束に天武派は屈して、白壁王が六十二歳で即位し光仁天皇となった。

私は、この時から既に藤原一族は、白壁王の子、山部王を次に予定していたと思う。光仁天皇は老齢で、山部王は三三歳、闊達で鷹狩りなどを好み、藤原一門の若手や姫達と親交があつたと思われる。皇族とはいっても、天智系で卑母の所生、皇位など望むべくもなかったから、中級官吏として人交わりをしていたであろう。

光仁天皇即位の大義名分は、聖武天皇の婿という点であつたから、皇太子は皇后となつ

た井上内親王から生まれた他戸皇子であつたが、二年後に母子ともに謀反の嫌疑で幽閉され、宝龜六年（七七五）四月に亡くなる。続紀には「井上内親王他戸王並卒」とあるが、同日であることから殺されたとみられている。

山部王は皇太子になる。これには藤原百川の力が大きかった、と後に桓武天皇が述懐している。（続日本後紀・承和十年七月庚戌条）藤原氏が、陰謀をめぐらしたことは明らかであろう。かくして光仁天皇は十年で老齢を理由に退位、山部王は桓武天皇となった。

## 2

桓武天皇は漢帝国の武帝に心酔し、自らを武帝に擬していた節がある。山部王時代、彼は大学頭の経歴があり、漢籍や故事に詳しくたはずである。

桓武の桓は「大きい、勇ましい」という意という。早く言えば「偉大な武」である。諡号は薨去後に奉られるものだが、その生前にふさわしい名を捧げるだろう。

武帝は衛青、霍去病らを派遣して西域を攻め、桓武天皇は坂上田村麻呂等を派遣し東北の領域を拡げた。さらには、かかる外征が庶民を苦しめるのは本意でないとして、中止の勅令をだしたことまで共通している。武帝が晩年西征を止めさせた「輪臺の詔」が伝えら

れ、桓武天皇に緒嗣・真道の「天下徳政相論」の話がある。延暦二十四年（八〇五）「緒嗣議して云く、「方今天下の苦しむ所は軍事と造作なり。この両事を停むれば百姓これに安んぜん」。これに対し、真道は反対したが、桓武天皇は緒嗣説を採った、という。これは真道あたりが武帝の詔を桓武天皇に献策し、緒嗣と組んで打った芝居であろう。桓武天皇、真道とも武帝の詔は承知していたはずである。

更に大きな共通点として「道教」がある。

武帝は道教の信奉者であった。「史記」の孝武本紀は司馬遷の書いたものが逆鱗にふれ他ものが書いたというが、記事は天を祀る話で埋められている。武帝の「泰山封禪」は有名であるが、桓武天皇も二度、交野で「郊天祭祀」を執り行っている。これは道教の行事であり、中国では皇帝が天を祀るのは当然だが、日本では初めてという。また、長岡京は道教の精神で築かれた（高橋徹著「道教と日本の宮都」という説があり、長岡京の域内には仏教寺院がなかった。

では、武帝に自らを擬する事と、史書に自らの治世を書かせる事と、どう繋がるのか。

歴史書の始めは司馬遷の「史記」である。

これは武帝の命令で司馬遷が書き、献上した。彼は、武帝の治世を「孝武本紀」に書いたが、

武帝が差し替えさせたという。

その後中国では、天命革まって王朝が交替すると、後の王朝が先朝のことを書くのが通例になる。

桓武天皇が、修史事業に熱心であったのも、自らの治世まで書かせたのも、武帝に見習ったと考える。

### 3

桓武天皇が自分の治世まで続日本紀に書かせた理由のもう一つは、後世に自分の登位や治世がどのように伝わるか、気がかりであったことにある。

井上皇后と他戸皇太子は、光仁天皇の命を呪詛した、という。しかし天皇は老齢であり、皇太子の地位は確立しているのに、呪詛する理由がない。（呪詛の話は、武帝の晩年に宮廷内で起きた「巫蠱の乱」に酷似している。武帝の皇后・皇太子は廃され自殺している。）前述のように藤原氏が光仁天皇に讒言して皇后・皇太子を廃し、やがて殺害したと見るべきであろう。これは、桓武天皇の責任ではないかもしれないが暗い影を落とした。更に即位後、皇太弟とした早良皇子の死については責任を免れない。

父光仁天皇は讓位の際、山部王に同母弟、早良皇子を皇太子とすることを命じた。桓武

は同意したが、後に寵臣の藤原種継暗殺事件に関与したとして退け、早良皇子は自殺してしまう。

このことは、他戸皇子以上に桓武天皇の傷になった。後々までその怨霊に悩まされ、崇道天皇の諡号を贈り魂魄を慰めている。

母親、高野新笠は百済の武寧王の後裔、和乙継の娘。白壁王の初めての女性だったらしい。百済から渡来した人の子孫は、河内、山背に固まって住んでいた。当時、人種差別があったとは思われず、桓武天皇も「朕の外戚」として隠していないが、やはり、気にはなっていたのではないか。そうした個人的負の部分、後世どう伝わるか、神経を使った結果、続日本紀は延暦十年まで書き込むこととなつたのではないかと考える。

百済王明信という女性がいた。桓武天皇の初恋の人では、と言われるが、継繩の妻となっていた。尚侍（ないしのかみ）であり、死後、従二位を贈られている

明信は天皇の秘書的役割も勤めていたらしい。継繩夫妻は百済系の多く住む交野に別荘をもち、桓武天皇は度々訪れている。

続日本紀最後の六巻はこの三人が額を突き合わせて練り上げたのではなかるうか。

自由執筆

リストラになった武士

佐藤 健 一

戦国時代では池田輝政に仕えていた毛利重能という武士がいた。武芸にはあまりとりえがなかったようだが、ソロバンは達人であった。関ヶ原戦という戦いの節目に武士を辞め、京都の京極辺りにソロバンの塾を作りソロバン師匠になった人である。

毛利は現在の兵庫県瓦林の出身であることは著書の『割算書』の跋文に「：撰津国武庫郡瓦林之住人今京都に住：」と書かれているから明らかであろう。池田輝政に仕えていたということは昭和二年刊行の『日本古典全集「古代数学集」』（與謝野寛、正宗敦夫、與謝野晶子 編纂）にも書かれている。解題の部分に書いてあるが、このことは明治時代になつてから発表された川北朝鄰の調査をもとにしているようだ。川北は吉田光由の調査をしていたが、京都の嵐山千光寺の丸山戒岳からの調査の通知から吉田光由と角倉了以などの関係を知った。川北はその事実の出所を問いあわせているので、「角倉源流系図稿」にいきついたと考えられる。「角倉源流系図稿」は宇多天皇、敦賀親王から続くもので、吉田氏の祖

である嚴秀、角倉氏の祖である徳春なども書かれ、光由については三十六行も書かれている。それに続いて一字下げて重能について十三行書かれている。この文を追加したのは吉田光由の五男の光玄で加州太守の命によるのである。この命令が何故なのか不明であるが、吉田家と前田家は繋がっていることがあるのかもしれない。すなわち、前田利家の二男の利政は関ヶ原戦では徳川家康に従わず、戦後所領を没収された。彼の娘を妻にしたのが角倉与一（玄紀）である。彼は了以の長男玄之の長子玄紀である。

光由の父は周庵といい、土方丹後守に仕えた医者であり、周庵の父は宗達といい池田三左衛門に仕えた医者であった。光由の教育については父よりもむしろ祖父が口を出すであろうから、幼い時は毛利の塾に通つたのであろう。

毛利は塾で使う『割算書』を元和八年に刊行した。昭和の時代では『割算書』が日本で刊行された数学書で最も古いと言われていた。これが、龍谷大学から古い数学書が見つかり一番古くはなくなつたが、本自体はかなり完成したものであり、それ以前のものが何度も書き直されたと、推察されていた。江戸時代になつてから外国から伝わって来た内容はな

い。全てが鎌倉時代や室町時代に中国や朝鮮から入って来ているものである。それが当時の日本の数処理の方法で述べられたもので、このころ他にも数学書に類するものがあつたと考えられる。内容は日用数学である。

九九のように暗記する必要のあるものが最初にくる。それでも九九はなく、割算の九九のような「八算」が最初である。これは『算用記』も『割算書』も同じで、二一天作五で始まる一桁で割る呼び声、四十四で割る割り声、四十三で割る割り声、十六で割る割り声などは頻繁に使うことからであろうし、様々な容器の容積を求めることや、利息の計算、両替え計算、それに飛鳥・奈良時代からの比例配分である「衰分」、普請の問題では「登り坂の問題」と言われる問題がある。この問題については知っている人に尋ねるべし、と『算用記』には述べているが、『割算書』でも計算法については述べられていない。この問題は現在では難しい問題ではなく、三平方の定理程度で求められるが、多少面倒である。三平方は勾股弦といつて自由に使いこなすのは江戸時代の数学からである。

自由原稿

### 水月湖から浮上する磁針新年代

高橋 正彦

「天皇陵の平面図の基準線は真北線と経年変化する磁北線の二本である」との仮説の障害のひとつは紀元四〇〇年以前の磁気サンプルが不安定な炉蹟に由来することにある。

ところが最近岡山理科大の畠山唯達氏によって三・四世紀代の新たな地磁気変移パターンが打ち出された(下図の曲線)。この新見解は「新資料に依るよりは、既存データの誤差の処理法による」との説明を得た。その特色は紀元三〇〇年前後に東偏と西偏が大きく入替わる点にあり、前後の年代に類例を見ず、解釈に苦慮するものである。

然るに最近これを裏付ける新たな資料が水月湖年縞に存在する可能性に気付いた。

……糸田千鶴他／岩石磁気……による  
水月湖の堆積環境変化の研究／日大文学部自然科学研究紀要 v28・1993

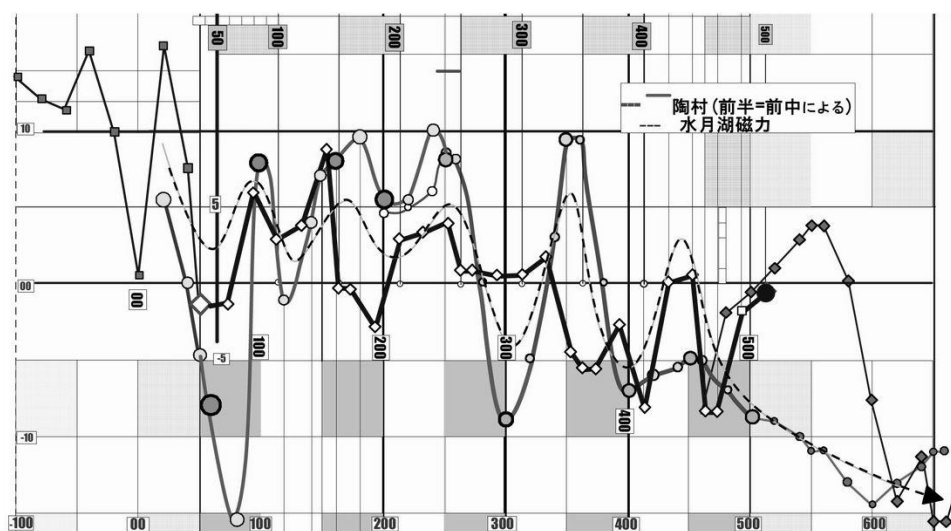
畠山データによる曲線と、糸田磁気曲線は、現状で対校しても相関は見えない。ところが水月湖磁力変移の折れ線を十五年ほど引下げると一〇〇〜四〇〇年間に相関があるように

◆折れ線は水月湖の地磁気変移

(糸田千鶴他 1993年の図上値による)

(X座標は天井のスケール基準、下端スケールに対して約十五年右に移動している)

●破線前半は前中一見 1997 後半は畠山 2013



見える。水月湖サンプルの年代校定は、琵琶湖堆積層の堆積速度との大まかな相関により、厳密な年縞計測によるものではなく、堆積速度推計に若干の遅速の誤差がある模様である。

#### 【水月湖年縞で分かる事実】

紀元一〇〇〜四〇〇年にかけて偏角はE(東偏)からWに変移するが、その過程は平滑ではなく小幅の上下動を含むように見える。

但し、その振幅は畠山パターンのプラスマイナス一〇度に及ぶ程大幅ではない。これは紀元四〇〇年頃にまで及ぶ。これを参考に、偏角の実際の変移を両者の中間と仮定すると、

- ① 偏角E(東偏)からWへの移行点は紀元三六〇年ごろ。(畠山パターンの三〇〇年西偏部分はあまり大きくないのではないか。)
- ② 紀元四五〇年頃の水月湖パターン弱東偏部分は若干強く判定すべきではないか。

右②の仮定は、偏角のEからWへの移行時期を渋谷説より遅い四五〇年頃に置く広岡説を説明するものである。(上図の陶村曲線は渋谷および前中説に基づいている)。

……以上の整理により……

●上図の陶村偏角線を強く評価する場合  
偏角のE・W移行点は紀元三八〇年頃、

●水月年縞偏角を強く評価する場合、E・

W移行時期は三四〇年頃と推計しうる。

この様な整理は、箸墓(初原的形式を持ち、陵基準線は特異な東7度を取る)の年代推定に重要な意味を持つ。即ち陶村パターンの場合、箸墓の年代は、紀元三八〇年頃、水月湖パターンの場合には三四〇年頃となる。

【水月湖年縞の堆積地磁気の再検討】

水月湖年縞における堆積層地磁気の測定はこのように重大な意義を持ち、その精密な再測定・年縞に基づく精密な年代決定、地磁気変移の範囲の確定が望まれる。

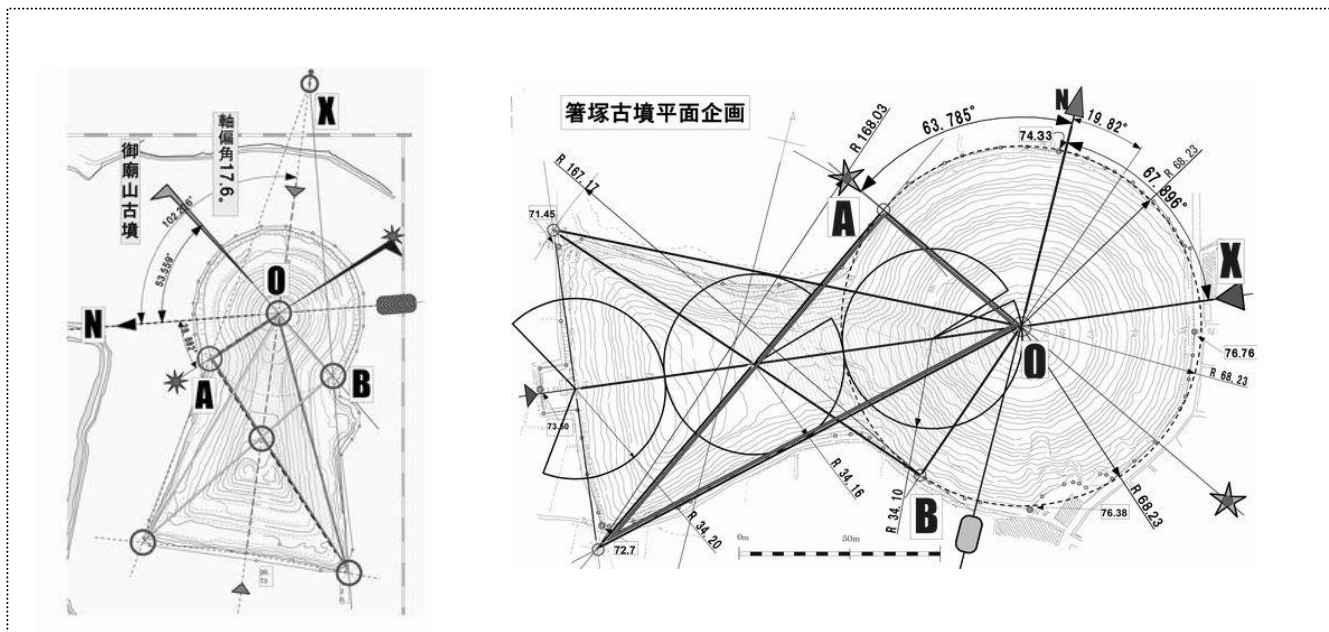
……然るに、水月湖サンプル採取点は水深三八メートル。ここから更に二メートルコアを打ち込むのは難題であり、より簡易な方法等御助言を広く要望する次第であります

【陵基準線と偏角との相関】

古墳時代中期の天皇陵に於いて方部角から円に至る接点A・Bには重要な意味がある。

(陵の両角からA・Bに至る陵の水際線＝側線は軸線上で交わる。是は中期の天皇陵平面の顕著な特色である。)

点AB及び軸線の作図過程を推論するに、諸陵において軸線・OA, OB 何れかが真北基準方位、残余の半端な方位は磁針によると考える。(図の御廟山は軸が磁針基準方位＝W17.6度



である。軸線が磁針方位を取る場合は多い。) 接線の作図には規玖(曲尺)が用いられた。規玖は天地創造の象徴である。

●AOBのなす角度は天皇陵中期では略直角であるのに対し、発生期では鈍角となり、ランスの観点から側線はA・Bの内側を通り、かつ頸の細いデザインとなる。

箸墓はAOが真北より戌(-60度)の方位、軸は寅(+60度)から更に東7.6度に偏している(＝偏角E7.9度)。

【地磁気変移に関する将来の展望】

仮に水月湖年縞の抽出によって紀元四世紀における地磁気の永年変化が確認された時に、地磁気永年変化に関する異論問題、更には、箸墓等天皇諸陵に関する平面企画基準線の解釈、及び、その意味する年次も連動的に確認される様に思われる。

……水月湖年縞抽出が全ての鍵となろう  
二〇一四年五月三十一日



自由原稿

## 出雲大社再考 (四)

祭神論争で飛び出した北島本流説

村上 邦治

明治十年に入り、神道界は、未曾有の教義論争で、沸き立っていた。新しく結成された神道事務局の神殿には、造化三神（天御中主神・高皇産霊神・神皇産霊神）と、天照大神の四神を、祀ることになっていたが、出雲大社大宮司第八十代出雲国造兼大教上千家尊福が、「四神に加え、大国主神を表名合祀すべし」と、繰り返して建議したのである。これに対し、伊勢神宮大宮司兼大教上田中頼庸が、頑強に反対したことから、神道界は、出雲派と伊勢派に分かれ、大紛争になった。

尊福の主張は、天神の勅により、顕界は皇上が統治し、幽冥界は大国主神が、主宰するとともに、天下の諸神を統御している。苦勞を重ね、国土を経営し、これを皇孫に譲渡、以後皇室を守り続けた、などの功績から、「四神と同列で表名合祀せよ」というものである。

一方、伊勢派は、次のような反対論で、出雲派に對抗した。

大国主神は、幽冥界の主宰神ではない。古典に明確な記載はなく、一家の私言にすぎない。

天地が成った後に、生まれた国神であり、先に生まれた、天神の恩義を受けている。尊福の合祀論では、皇祖天神も、幽冥主宰神大国主神の下位に、なってしまうことになる。

神殿には、四神に加えて、八百萬神が、祀られることになっており、大国主神もこれに含まれるので、二重に祀ることになる。大国主神を表名合祀するのであれば、他の神々（イザナギ、イザナミ、スサノウ等）についても、祀る必要がある。

尊福の主張は、江戸中期以降、本居宣長や平田篤胤らの、国学や復古神道により、神道界に、広く受け入れられていた。神道が「穢れ」として避けてきた、死後の世界について、説き及ぶことが可能になり、宗教として確立できることになった。古来、死後の幽冥界における教義が、不明確であったため、仏教諸派の下に甘んじていた神道家は、大国主神幽冥界主宰説に賛同し、尊福を支持したのである。

伊勢派は、政府の神道政策（神道非宗教化、

天皇中心の皇室神道体制、伊勢神宮を頂点とする神社体制）を実現するため、神道事務局の運営を牛耳り、出雲派に對抗した。尊福の唱える大国主神を、天照大神と同列に祀ることとは、神道の宗教化に結び付き、ひいては、天照大神を頂点とする皇室神道や伊勢神宮と、対立することになり、「大国主神表名合祀」は、政府及び伊勢派にとつて、断じて、認めることのできないことであった。

かくして、全国の神道家は、両派に分かれ、自説を主張し合い、少しも譲る気配はなかった。しかし、政府の新神道政策は、古来の神道から逸脱していたことから、次第に、尊福の主張は、優勢になったのである。

教義論争では、歯が立たなかった伊勢派は、出雲派内部に混乱を引き起こし、領袖尊福の追い落としを画策した。すなわち、もう一方の出雲国造家である北島家を、味方につけることにしたのである。

十三年春、第七五代北島国造全孝の弟重孝長男、勝孝（第七六代脩孝の従弟）に接近し、伊勢神宮分教会に誘い入れた。この勝孝を通じて、当時無役で、不遇をかこつ、北島家当主脩孝の邸内に、神宮教会出雲分会所の設立を、働き掛けたのである。それも数度にわたる、



執拗なものであった。

この伊勢派の勧誘に対し、脩孝は、直ちに書面にて断った。そして、尊福に、伊勢派の動向を、詳細に知らせたのである。

十三年暮、出雲派優位を背景に、尊福は、多数決をもって表名合祀を、一気に実現させるべく、神道大会議の開催を要求した。すでに、この年の四月には、神殿は落成していたが、両派の論争が激化したため、祭神について、明確な態度を示すことができない神道事務局に対し、合祀決断を迫ったのである。

北島国造家の抱き込みに失敗し、さらに形勢不利な大会議開催を提議され、窮地に追い込まれた伊勢派は、ここで『北島家系伝略』を、全国の神道家に配布する、姑息な策にでた。出雲国造家は、千家家ではなく、北島家が本家本流であることを、世に知らしめ、尊福の名望を、失墜させようとしたのである。最早、手段を選ぶ余裕さえないほど、伊勢派は、追い詰められていた。

尊福は、直ちに「伊勢派とは、神道教義上の紛議であり、意見が合わないことで、各自の榮譽を害し、名望を失わせんとする行為は、断じて許されない」と、強く抗議した。伊勢派のこのやり方に対し、神道事務局は、「貴家

に申し訳なく、印刷物は配布すべきものではない」と、ひたすら、謝罪せざるを得なかったのである。

祭神論争の最終段階で、伊勢派から突然引き起こされた、両家分裂の史実暴露は、北島脩孝にとっても、大いに驚いた事であろう。これまで、幾度も北島家本流を、世に問うてきたが、この度は、事もあるうに、出雲派と対立する伊勢派から、喧伝されたのである。

しかし、第七六代北島国造脩孝は、この伊勢派の暴挙には、一切動じなかった。大国主神を祀り、出雲大社に奉仕する出雲国造の矜持は、まったく揺るぐことは、なかったのである。(つづく)

#### 参考文献

『明治国学発生の研究』(藤井貞文)

自由原稿

#### 気になる漢字

漆原直子

日本の漢字には、「音読み」と「訓読み」がある。後者は、中国大陸から伝来して来た漢字を、日本語読みにしたものであり、

前者は日本に伝来して来た当初の読み方である。6月のご講演『続日本紀…2つのなぜ』でも、ご説明があったが、その『音読み』にはさらに、「呉音」と「漢音」、「唐音」がある。

最近、放送大学の講義で、「アジアの漢字文化」を受ける機会があった。

日本の漢字の「音」は、「中国語原音」を残し、長期に渡る持続的な漢字の受容により、1つの文字に対する読み方がいくつも生じ、読み方の「層」を形成し、字義に関係無い読み方をする場合もあるという。例えば「経典」という文字は、「キョウテン」と読めば、仏教の教えを著した書物で、「ケイテン」と読むと、儒教の古典群をさすとのこと。この「層」は日本特有で、同じ漢字文化圏にある朝鮮半島やベトナムでは起きていない。中でも「呉音」が先に日本列島に伝わり、「漢音」が唐時代中期(9世紀初頭)、慧琳『一切経音義』の伝来から伝わったとみられ、日本の漢字音の特徴は、中国語原音を体系的に保持していることであるという。日本の漢字の歴史は実に複雑怪奇な、日本の歴史その物を現わしているような気がする。

私は、中国語も音韻学も全くわからないので、そういうものなのかと思うことしかできない。ただ、漢字を駆使したいという欲求はあり、自慢ではないが、小学生の時漢字の小テストではたいがい満点をとり、ここ数年前

には、子供の小学校のPTA向けの漢検を受けて、受験生中トップの点数で二級に合格した。次は準一級を目指したいと思う所である。

ここからが本題であるが、私が今気になっている漢字がある。それは、『日本書紀』の敏達紀十年春閏二月に、「蝦夷の魁帥(ひとこのかみ)首領(綾糟(あやかす))」が辺境にて騒動を起こした。その結果ヤマト朝廷に召されて、「……元悪を誅さむとす」という詔を受けた綾糟は、泊瀬川の中に入って、三諸丘(三輪山)に向かい、水を飲(すす)って、今から子々孫々に至るまで帝に仕え、盟いを違えば、天地の諸神と天皇の靈に自分達の種族は絶滅されるだろう、という盟いを立てたのである。気になる漢字というのは、「飲」という字である。『古代東北と王権 「日本書紀」の語る蝦夷』中路正恒著によると、この「飲」という字は、口をとがらせて皿にさしこむようにして血をすするという意味であり、それは、盟約を定める時に誓いのしるしとして、皿に生贄の血をつぎ、それを互いにすすった、という誓約の儀式よるといふ。また、『史記』平原君の条や『漢書』匈奴伝等に、背くことの許されない重い盟約の形式として、鶏、犬、白馬等の血を皿や、頭蓋骨にとつて(鬲、饗杯の事かと思われる)互いに「飲る」ということが記されているという。この「飲る」という文

字は、専ら「血をすすって誓約する」という行為に用いられたそうである。そして、蝦夷綾糟は、血の代わりに泊瀬川の水をすすったのである。

これが、何を意味するのか、蝦夷綾糟等がそのような血の盟約の習慣を元々持っていたのか、日本書紀の記述者がその情景を見て、そのように判断したのか、いずれにせよ、そこには匈奴等の遊牧騎馬民族を彷彿とさせるものがある。「蝦夷」について、『日本書紀』の景行紀の中で、「冬は穴に寝、夏は木に棲む。毛皮を着て、血を飲み、兄弟でも疑い合う。山に登るには飛ぶ鳥のよう、草原を走ることは獣のようであるという。……(全現代語訳『日本書紀』宇治谷孟 講談社学術文庫より抜粋)という記述があり、蝦夷がいかに野蛮であるかを表現しているのだが、これは裏を返せば、遊牧騎馬民族の生活習慣の特徴を現わしてはいないか。特に「血を飲む」という行為は、「血の盟約」とも関連しているのではないか。ちなみに、『日本書紀』は、中国大陸人と和人と複数で分担執筆したという見方がある。この敏達紀の条は中国大陸人が書いた所とされている。

たった一つの漢字から、あまり憶測しない方がよいのかもしれないが、非常に意味深い漢字であると思う。このような解釈の仕方の

是非や、他にも意味深い漢字があれば、ご教示頂きたいと思う。

## 祝出版

瀧澤 中 著

『戦国大名』失敗の研究』

株式会社PHP研究所

本体価格七二〇円

政治力の差が明暗を分けた

本来「敗れるはずのない者」がなぜ敗れたのか？

第1章 武田勝頼の致命傷

第2章 足利義昭のしぶとい首

第3章 織田家臣団の有能ゆえの危険な未来

合戦の計算違い

第4章 あり得なかった関ヶ原

なぜ秀頼は豊臣家を守れなかったか

第5章 政治力はいかにして失うか

終章 政治力はいかにして失うか

いかにして失うか